

はーとふるメッセージ

2001

第3回

特選作品紹介

作文・小学生の部



泉山英和さん
(若葉小学校6年)

ある出来事から 学んだこと

ぼくは最近、いろんな所で外国の人を見かけるようになりました。どこの国の人たちだろう。見知らずの国で生活するってことはとても大変なことだと思います。

今年の夏休み、ぼくは衝撃的な出来事に会いました。それは、ぼく自身、『人権』について考えさせられる出来事です。

標語・中学生の部



松宮麻美さん
(東中学校2年)

女だから

そういう言葉

もういらない

わらっている人たちもいました。お母さんがぼくに小声で、「早く帰ろう。」

と言ったので、ぼくは車の中へ急いで逃げるように入りこみ、家へ急ぎました。ぼくは車の中で、「あの外国人はいったい何を言ってるんだ」とつぶやいていました。楽しい気持ちなんかふきとんで、何だか車の中が暗く重いふんいきになりました。

それから数日後、ダイエーに買い物に行ったぼくは、軽食コーナーで外国人の親子を見ました。お父さん、お母さん、子どもが三人の家族です。親子で何かを話しながら、ジュースを買って飲んでいました。子どもたちも親たちもとても楽しそうでした。何げないこの様子が、ぼくは見ていてうれしくなりました。ぼくもよく家族と外で買い物しますが、その様子と何もちがいません。

そう思ったとき、ぼくはぶと数日前の出来事を思い出ししました。「日本人のくせに」「中国人のくせに」と言い合った二人の男の人。日本人も中国人も関係ありません。おたがいの国のこと、相手の心を傷つけていいはずがありません。この人たちは人権の大切さを考えていないのではありませんか。

それに、自分自身もふりかえらなければなりません。「あの外国人……」などと思わずつぶやいた自分。知らず知らずのうちに日本人の人の味方をしていたのです。気がつかないうちに「外国人の人のほうが悪い」ときめつけてしまっ「こわさを感じました。」

おたがいの人権を尊重し、みんなが仲よくできる社会をつくらなければ、と思いました。

選評

作者は外国人の親子に出会い、「人のくせに」と言い合った人々の誤りや、自分自身の外国人に対する偏見に気づくことができました。ふだんの生活の中にある誤りに気づき、自分自身の人権感覚を高めていこうとする姿勢がうかがえる、よい文章です。このような姿勢は、人権尊重の社会づくりには欠かせません。これからも大切にしていってください。